

## 論文要旨

氏名	笠井 信吾
タイトル (日英併記)	The level of IL-10 in gingival crevicular fluid of mobile teeth related to periodontal healing after initial periodontal treatment (動揺歯の歯肉溝滲出液中 IL-10 量は歯周基本治療による歯周組織の治癒に関与する)
論文の要旨 (日本語で記載)	
<p>我々は外傷性咬合によって生じる歯の動揺は歯周基本治療後の歯周組織の治癒に影響を与える一つの因子であることを報告している。しかし、外傷性咬合が慢性歯周炎による歯周組織破壊にどのような影響を与えているかを組織学的方法以外で検討した報告は少ない。本研究の目的は、動揺歯に対して歯周基本治療を行い歯肉溝滲出液 (GCF) 中のサイトカイン量と歯周組織の治癒状態を経時的に測定し、治療前の GCF 中サイトカイン量が歯周基本治療による治癒を予測するためのバイオマーカーとなり得るか検討することであった。</p> <p>九州歯科大学附属病院歯周病科を受診した選択基準を満たす慢性歯周炎患者 13 名から選択した 20 歯を被験歯とし、観察研究を行った。被験歯から 1 回目の GCF 採取を行った後にプロービングポケット深さ (PPD) と動揺度を含めた臨床的測定を行い、引き続き口腔清掃指導、および歯肉縁上スケーリングを行った (ベースライン)。2 回目の GCF 採取後にも臨床的測定を行い、引き続き被験歯に対して咬合調整を行った。3 回目の GCF 採取後には臨床的測定を行い、引き続きスケーリング・ルートプレーニング (SRP) を行った。次の来院時に、4 回目の GCF 採取と臨床的測定を行った。GCF 中サイトカイン量の測定には抗体メンブレンアレイ (Human Inflammation Antibody Array C3) を使用した。統計学的解析には上記の測定値に加え、PPD から算出される歯肉溝内縁上皮面積 (PESA) も使用した。</p> <p>PPD および PESA は歯周基本治療の期間を通じて有意に減少した。歯の動揺度は咬合調整後以降に、ベースラインと比較して有意に減少した。被験歯 20 歯のサイトカイン量に関しては、Eotaxin, Eotaxin-2 が SRP 後とベースラインとを比較して有意に減少していた。また、被験歯 20 歯を 2 群 (SRP 後に PESA が健全と考えられる範囲まで減少した群と減少しなかった群) に分けたところ、健全範囲まで減少した群ではベースライン時から咬合調整後まで GCF 中 IL-10 量が有意に高かった。さらに 20 歯を咬合調整後に動揺度が減少した群と減少しなかった群に分けたところ、減少した群ではベースライン時の GCF 中 IL-7, IL-11, IL-12p40 の量が有意に低かった。</p> <p>慢性歯周炎患者の動揺歯を被験歯として、歯周基本治療による臨床的改善と GCF 中サイトカイン量の変化が関連するかを調べた。その結果、治療開始前に GCF 中 IL-10 量が高い場合には、治療への応答性が高く良好な予後が期待できる可能性が示唆された。また、治療開始前に GCF 中 IL-7, IL-11, IL-12p40 の量が低いほど咬合調整に対する応答性が高い可能性が考えられた。GCF 中サイトカインによる治療反応性の評価を確立するためには、本研究で明らかになった結果をさらに ELISA などの手法により確認する必要があると考えられた。</p>	